

自分づくりの大切さ

平岡 祥孝

大学生の就職問題は、就職氷河期とまで呼ばれるようになった。まさに「大学は出たけれど」。大学にとって就職率すなわち出口の評価が、受験生確保すなわち入口に極めて大きな影響を与えることは、「大学は就職予備校ではない」と主張する者として否定できない。各大学は生き残りをかけて様々な就職支援態勢を敷かざるを得ない。

また、卒業後の職業生活を意識して必要とされる能力が提唱されている。厚生労働省は「就職基礎能力」を、経済産業省は「社会人基礎力」を、文部科学省は「就業力」をそれぞれ提唱している。これら各々の力を詳細に説明することは省略するけれども、筆者からすれば何ら新鮮な印象を受けない。職業人生を一定年限歩んできた者ならば、「仕事をするために必要な力を挙げるとすれば、まあこんなものかなあ」という感じである。

他方、かの有名なトロウ・モデルに従うならば、高等教育機関への進学状況はユニバーサル・アクセス型の段階に入ってきている。

要するに、高校生の二人に一人が高等教育機関に進学する教育大衆化時代の到来である。学問を追求したい選ばれし者のみが大学に進学する時代は、もはや過去のものとなったといっても過言ではない。

さらに少子化を背景として、一般入試（学力選抜試験）以外の多様な入試方法が導入されている。それらの選抜方法では、おしなべて入学が容易になったゆえに、基礎学力や勉強意欲を欠いた大学生が増加している。卑しくも大学に身を置く者として、大学を愚者の楽園と呼ぶことは厳に慎まなければならない。けれども、小学校で習った分数ができない、中学校で習った漢字が書けない等々、学力面からして本来ならば大学に進学すべきではない高校卒業生が少なからず在学していることも、また現実だ。本当に学力低下は著しい。

したがって、「就職難イコール可哀相な大学生」であるとは一概に言えないのではない。なぜならば、仕事と勉強は本質的に同じであると考えからである。就職支援やキャ

リアサポートの中核が、エントリーシートの書き方や適性試験の攻略法、あるいは面接対策や自己PR方法などの浅薄なテクニック偏重に往々にして陥っていることこそ、問題視されなければならない。

あえて誤解を恐れずに言えば、学士課程それ自体キャリア教育の四年間であつてもよいのではない。学習活動を通して、仕事の力を培っていくことができる。

主体性や自発性あるいは思考力や表現力など、それらは日常の意欲的な学習で鍛えられる。また、職場で最も求められているコミュニケーション能力は、人生の先輩でもある教員と真剣に向き合つて対話していくだけでも向上していく。

大学の学びを通して自らを成長させることが、採用内定を得る最良の道であることを訴えていくことは、何も青臭い書生論ではない。厳選採用が当然であるからこそ、学生時代に確かな「自分づくり」が絶対必要である。そのためには、大学生活においてIQ（知能指数）とEQ（感情指数）の両者を高めていかなければならない。

加えて大事なことは、学生の教育を担う教員こそ社会性や社会常識を身につけて、学生支援に努力することである。

△ひらおか よしゆき・札幌大谷大学短期大学部教授▽